伊藤整全集

第六巻

伊藤整全集

6

新潮社版

編纂
瀬沼茂樹
平野　謙
小田切　進
奥野健男

少年・若い詩人の肖像　他
定価二〇〇〇円
昭和四十七年八月十日　印刷
昭和四十七年八月十五日　発行
著者　伊藤　整
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話
東京二六〇―一一一一　郵便番
号一六二　振替東京八〇八
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社大進堂

伊藤整全集
―6―

© Sadako Itō
1972. Printed
in Japan.

乱丁，落丁本
はお取替えい
たします。

伊藤整全集 第6巻 目次

少年

一、嘘　一〇
二、風　一八
三、告白　二六
四、町で　三三
五、ピストル　四二
六、青い鳥　五四
七、学芸会　六七

若い詩人の肖像

一　海の見える町　七八
二　雪の来るとき　一二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

三　卒業期　一四二
四　職業の中で　一五九
五　乙女たちの愛　一九七
六　若い詩人の肖像　二三九
七　詩人たちとの出会い　二六五
あとがき　三二三

短篇小説（昭和21年～同32年）

子供暦　三二六
還らぬ人　三四〇
三度目の話　三四八
灯をめぐる虫　三五六
たわむれに　三八〇

美少女　四〇三
生きる怖れ　四一一
めぐりあい　四三四
山羊と私　四四一
犬と私　四四五
こぼれたミルク　四五一
文学祭　四六一
花ひらく明治　四七一
泣き人形　四八四
ある女の死　四九四
詩人伝　五〇四
妨害者　五一一
花火　五一九
モデル出現　五三〇

虹　五三九
発端　五五二
*
「少年」あとがき　五六三
*
編集後記　瀬沼茂樹　五六五

伊藤整全集 第6巻（小説）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

少

年

一、嘘

太平洋戦争の終るすこし前に、私は疎開で東京から郷里の村へ戻った。村の往還で私は、とがった蒼白い顔に鉄縁の眼鏡をかけている稲木房太郎に逢った。私より二つ年上だから、彼は四十四歳になっている筈であった。つぎはぎだらけのカーキ色の国民服に、下駄をはいたその姿は、人違いかと思うほどふけていた。しかしそれは昔の稲木房太郎の痩せてしなびた姿であった。私は十年あまりも彼と音信不通であった。私は彼がもう村にはいないのだと思っていた。私の母と彼の母とは再従姉妹であった。幼年時代から少年時代にかけて、彼は私の離れられない友であった。一人息子で早く父を失った彼は、二十歳を過ぎるとすぐ結婚したが、その細君は子供を一人残して早世した。彼はそのあと家に落ちつかず、子供を老母の手にゆだねたまま、色々な女と同棲しながら各地を転々し、浮浪者のような生活をしているという噂を私は東京で聞いていた。

思いがけず逢ったなつかしさに私は声をかけたが、彼はにやにやと笑っているだけであった。久しく逢わないので、思い出せないのか、と思った。

「おい、俺だよ。忘れたのか？」と言っても、すこしきまり悪そうな笑いを皺だらけの顔に浮かべただけで、彼はそのまま海岸の方へ歩いて行った。

「房太郎に逢ったが、あれはどうかしているのかい？」と家へ戻って弟に訊くと、「うん、房さんは、息子が戦地へ行ってから気が変になってなあ」と言った。

彼の老母が亡くなって、あと房太郎の子供の京作が一人残った時、房太郎は飄然と一人で村に戻って来た。そして十六か七になっていた息子と二人で母がどうにか手入れしていた葡萄畑をやって暮していた。その息子が入隊し、硫黄島で消息を絶った頃から、房太郎は頭が変になったというのであった。もっとも村へ戻って来た時から頭が普通でなくって、話の筋道が通らなかった。村人に言わせるとその病気は梅毒から来たものらしい、とのことである。

「二三日うちに京作が戻るから」と彼は知人に逢うと言っている。その京作という息子も消息を絶ってもう一年余に

なっている。硫黄島の部隊は全滅らしいから、帰る望みはないと村の者は話し合っている。

　私は房太郎が息子の戻らないことを理解できずにいると聞いて、さっきの彼の姿を思い出すと、胸が痛くなった。私の母が時に彼の着物を洗濯したりつくろったりしてやるので、房太郎は私の弟の家へは時々やって来た。私は弟の家のすぐ隣に住んでいたので、彼を見ると、時々煙草を分けてやった。二人で縁側に腰かけて煙草をのんでいると、彼に教えられて煙草を喫みはじめた二十歳頃のことが思い出された。彼は段々私を認めるようになって来たが、それは煙草をくれる人としてであって、昔の私としてではない。

「房太郎でも食糧不足だけは分るらしい」と母が言うように、彼は葡萄畑を二段歩ほどつぶして、麦や馬鈴薯を作っている。

「肥しを使わないからろくなものは出来ないだろうが」と母が心配している。彼はがらんとした大きな家にひとりで住み、配給物は忘れずに取りに行って、どうにかこうにか暮している。私の母は亡くなった彼の母を時々思い出しては、

「おしまさんが生きていたら、悲しがるだろう」と涙を浮べている。

　私は縁側に腰かけて、昔と同じ山の斜面や神社の森などを眺めながら、彼と話をし、彼に田崎先生のことや、幻燈会のことや、徳光庄吉のことなどを思い出させようとした。彼は時に、ああそうだったという風にものの分った笑いを浮べて、私をじっと見、私を思い出したような顔をする。だが次の日はもうすっかり他人の顔つきになっている。彼を相手に甲斐のない話を繰り返しているうちに、私は少年時代に自分の心に刻まれた暗い不安や、彼との交際をきっかけとして起った様々なことを、あの昔の幻燈の絵のような古風な稚拙な形で次々と思い浮べるのであった。年月はぼうぼうと過ぎ、国は戦いに破れ、幼な友達がこうして孤独の中に癈人として生きて残っている。そして過去は悉く忘却の中に消え去ろうとしている。そう思って、房太郎を見ていると、私の心には悲痛な思いが湧く。それは遠く去った少年時代への愛惜であろうか。それとも戦争が私たちに与えた惨めな生活の破滅から来るのだろうか、それとも人生そのものの推移の厳しい怖ろしさから来るのだろうか。私にはよく分らない。その悲しみを描こうとすれば、彼と過した少年時代からの悉くを物語らねばならなくなる。

　村の学校の前には道路から門柱の立っているところまでポプラの樹が植えられてあった。ポプラの葉は、風が吹くと葉柄のさきでくるくる廻るように揺れて、小さく日光を

反射した。そのポプラの並木のつきあたりに、学用品や雑貨を売る店があった。鉛筆とか半紙とか墨とか帳面などが、幾つかのガラス箱に入れられてある。それ等の箱は奥の方が次第に高くなるように傾斜させて、縁無しの畳の上に並べられてあった。間に一杯にひろがった土間には、傘や鍬の柄や草鞋（わらじ）や合羽（カッパ）や煙草の箱などが置かれてあり、天井には寒天を縄でくくったのが釣り下げてあったりした。

それが稲木商店であった。外から見ると屋根の破風が三角形に道路に面しており、低い庇（ひさし）になった手前のさしかけの屋根の上には、畳一畳ほどの看板が前のめりに置かれてあって、稲木商店という金文字が書いてある。その看板に隠れるように、破風のところに二階の硝子窓があった。この辺の家の建てかたは、普通の形で、屋根裏が大きく作られ、そこが中二階になっているのであった。稲木商店の二階にはたいてい学校の先生が下宿していた。

その頃は田崎先生という丸顔の色の白い大柄な二十二三歳の女の先生がそこに下宿していた。私たち少年の眼で見た二十歳ぐらいの女性は、完全に大人であり、その上、村の生活がすっかり膚に染み込んだ娘たちや母親たちと違って、高等女学校を出たこの学問のある若い女性は、その美しさと教師という権威とのために、不思議な、神秘な魅力を漂わせているのであった。

稲木房太郎は、この稲木商店の一人息子であった。私の一年上級で、年は二つ上であった。彼は来年小学校を出て隣町の中学校の試験を受けることになっていたので、毎日夕食のあと、食卓で田崎先生に勉強を見てもらっていた。房太郎はその頃からきょときょとして落ちつかない子供であった。私は彼より一年下級なのに、彼の唯一の親友として扱われていた。房太郎は同級生の間では、身体も小さく、弱虫として特別視されていた。二つ年下の私に対しては、そういうひけ目を感じないですむらしかった。私の方は彼と一緒にいると気持が楽なのであった。同級生の間にありがちな競争心や嫉妬心も起らないし、それでいて、私は房太郎に較べて自分の成績がよいことで、優越感を持つことができた。房太郎の方ではまた、私の習っていない算術や読方の本で勉強しているという僅かな優越感があった。

私の母の再従姉妹に当る房太郎の母は穏和な、静かな、色白の太ったひとであった。房太郎の父は漁夫あがりの利かぬ気の男で、顔が長く、鼻が大きく、がらがら声でものを言った。稲木家では子供が五人生れたが、みな生れて一年か二年すると死んだ。それが、この強情な漁場の親方稲木房吉に、生きものの命を絶つ仕事を反省させ、漁業をあきらめさせる動機になった、という話であった。そして村の稲荷さまに何日か願をかけた後に生れたのが房太郎であ

った。房太郎は両親にとって子供以上のものであった。よそから預った貴重物のように彼は扱われていた。一年二年のあいだは雨が降れば、母親は、目のさきの学校まで房太郎を負ぶって行き、生徒入口の板簀子の上に彼を下し、学校が終る頃はまた背負いに来るという風で、校長先生から注意されるまでそれが続いた。房太郎はいつも白と藍のけじめがはっきりとした、袖がぴんと張っている新しい絣を着せられ、その頃流行り出した木綿メリヤスのシャツと股引を下に着ていた。頬は蒼白く痩せて、とがっていた。福福しい母親にも、魁偉な容貌の父親にも似ていなかった。稲荷さまの申し子だから、稲荷さまに似てるんだ、あの子は、と村の人は言っていた。

その年の秋頃から私は、夕食を早目に済ませて房太郎の家へ本を持って出かけるのだった。弟や姉がうるさいから、房太郎のうちへ勉強に行くのだということになっていた。父母は、うちでも田崎先生にお礼をしなければならんなあと言っていた。しかし私は田崎先生の前で房太郎の勉強の相手をすることや、そこで出されるお茶菓子がたのしみであった。田崎先生は、我儘で勉強のできない房太郎よりも、何となく私をひいきにしてくれているように思われるのだった。

「やっぱり一人で勉強するよりも、お連れのあった方がよろしいですわ」と田崎先生は房太郎の母に言うのであった。

「靖ちゃんは、しんぼうがいいからね。うちの房太郎はなぜ厭きやすいのだかねえ」と小母さんは先生に言った。私のことを、出来るとか、頭がいいとか、小母さんは決して言わなかった。厭きやすい子としんぼうのいい子という区別で小母さんは押しとおした。田崎先生は、白い肘を着物の袖から出して、机の左と右に坐っている私と房太郎を見ながらだまっていた。そして時々房太郎が書き間違うと、

「あら房太郎さん、ちょっと、その帳面を貸してごらんなさい。あなた、こう思ったのねえ、だけど、ここは、この家のこっち側をまわった方が、ほら図面を見たって随分遠いでしょう。ね、そう思わない？　だから、ここが五間なら、こっちは、もっと長い筈なのよ」

そういわれると房太郎は返事をせずに考え込むのであった。そして田崎先生が、その先を更に説明する。すると、どこかで房太郎に先生の説明が納得ゆく。すると、彼は何も言わず、だまって先生の手から自分の帳面を、ずるずると引っぱって取る。

「ね、ほらね、分ったでしょう」と先生は引っぱられる帳面に鉛筆で書きながら手を伸ばしてやる。

「どう靖ちゃん、出来て？」とだまっている私の方も、時間の終り頃になると田崎先生は見てくれる。

「この字の書き方はここから先に書くのですよ。ほら出来てしまうと分らないけれど、五つ同じ字を書くのに、みんなあなたはツクリの方から書いていました。これはシンニュウじゃなくてヘンなのよ。私、ちゃんと見ていたのですからね」

その頃になると房太郎は厭きて、あちこちと首を動かす。凝った肩を直すようなふりをしているが、お茶と菓子が待ちどおしいのだ。田崎先生の、机にのせた左手のむっちりと太った白い手首には、赤い細い革で舟形の腕時計が巻きつけてある。だが時計は手首の内側にまわされているので時間が分らない。先生は時々その軟かい白い手首をくねらすようにして腕の内側を、私たちに見せずにちらりとのぞく。柱時計は先生の右手で、私の正面の高いところにかかっているのだが、先生は決してそれを見上げない。私も時計を見上げるのは何となくはばかられる。房太郎は後ろにある時計を見たがるように、勉強に厭きると、首をあちこちに動かすのだ。

房太郎の父は、昼間かけていない老眼鏡をその大きな鼻にかけて、新聞をゆっくりと読んでいる。母親は針仕事をしている。夜になっても時々店に客がある。母親は店へ出て行って、だまって物を渡すこともあれば、また時々は長長と話し込んでいることもある。私たちの勉強は八時に終ることになっていた。小母さんは時間を見はからって戸棚から大きな蓋つきの罐を取り出して、その中から煎餅を皿に盛った。房太郎は大分前から、机に向っているだけで何もしていない。その頃はちょうど田崎先生が私の勉強を見てくれる時刻になっていた。田崎先生は絶えず房太郎の方を直したり教えたり運算してやったりしていて、私のは時間の終りの十分間ぐらい見てくれるだけであった。

「もう九月ですからね。九、十、十一、十二、一、二、三と、あと半年しかありませんから、先生、房太郎のことはどうぞお願いいたします」と茶菓子を出しながら小母さんは、中学の試験をとおるのが、田崎先生の努力次第でどうにかなると思っているような言いかたをした。

房太郎の父はそしらぬ顔で新聞を読みつづけているが、喋っている小母さん以上に房太郎の勉強に関心を持っていることは分っていた。彼は私たちの勉強が終るまで新聞を手離さずにいる。房太郎の父はその新聞を読むのが勉強のつき合いのようなものだった。私たちがお菓子に手を出すときになると、やれやれという風に新聞を傍へしまい、眼鏡を折り畳んで、時計の下の引き出しへ入れ、私たちの食べるさまをじっと見ていたり、房太郎から煎餅を半分に割ったのをもらって、嬉しそうにしかし、別にうまくもなさそうに齧るのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.